

漁業者と取り組む資源管理型漁業

エビ類（図1）を主要対象種とする底びき網（えびこぎ網）の袋網（図2）に使用される目合は、これまで14節（目合内径:21.9mm）と小さかったため、小型個体の混獲による単価の下落や水産資源への悪影響などの問題がありました。そこで、県では笠岡市北木島地区の漁業者とともに袋網の適正な目合を検討し、平成25年に13節（23.8mm）、27年に12節（26.4mm）と、目合を拡大するとともに、その具体的な効果の検証に取り組みました。

まずは、水槽内でエビ類の網目選択性試験を行い、全長が目合内径の約2倍であれば、半数が網内に留まること、目合を14節から12節に拡大した場合、全長50mmの小型個体の採捕数を43%減少できることを明らかにしました（図3）。実際に通常操業で漁獲されたエビの全長を測定したところ、最小銘柄に分類される全長70mm未満の個体数割合は14節が78.5%、12節が28.1%と目合を拡大することで小型個体が大幅に減少したことが明らかになりました（図4）。

取り組み開始前の平成23年の出荷量および出荷額を1として、それ以降の経過をみると、25年以降は小型個体の個体数割合が減少し、全体の出荷量も23年比0.4~0.7と減少しましたが、出荷額は23年並に推移しており、単価の向上と小型個体の保護が両立していることが分かります（図5）。

また、漁業者からは小型個体の減少により、選別作業が楽になったとの評価もいただいています。

価値の低い小型個体の不合理漁獲の防止を目的とした資源管理型漁業の取り組みは、出荷量の減少を伴う場合があるため、経営を含めて十分な効果の検証が必要です。この取り組みでは単価の向上により、出荷額が維持されており、今後もその推移をみながら、必要に応じて袋網の目合を調整するなど、漁業者とともにきめ細かく取り組みを継続していくことにしています。この成果を県下の各地域で取り組まれている資源管理型漁業にも活用していただければ幸いです。（開発利用室：中力）



※バーは10mmを示す

図1 主要対象種

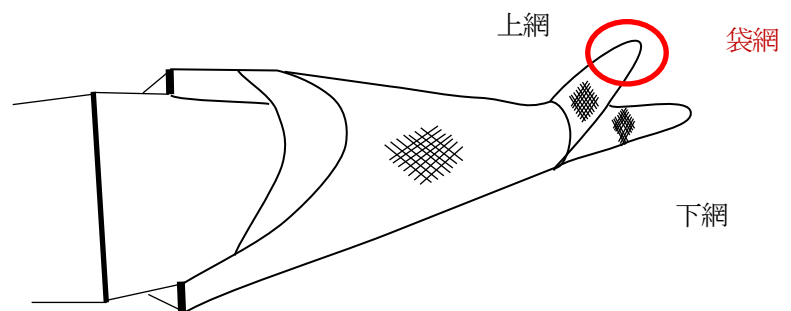


図2 えびこぎ網の漁具

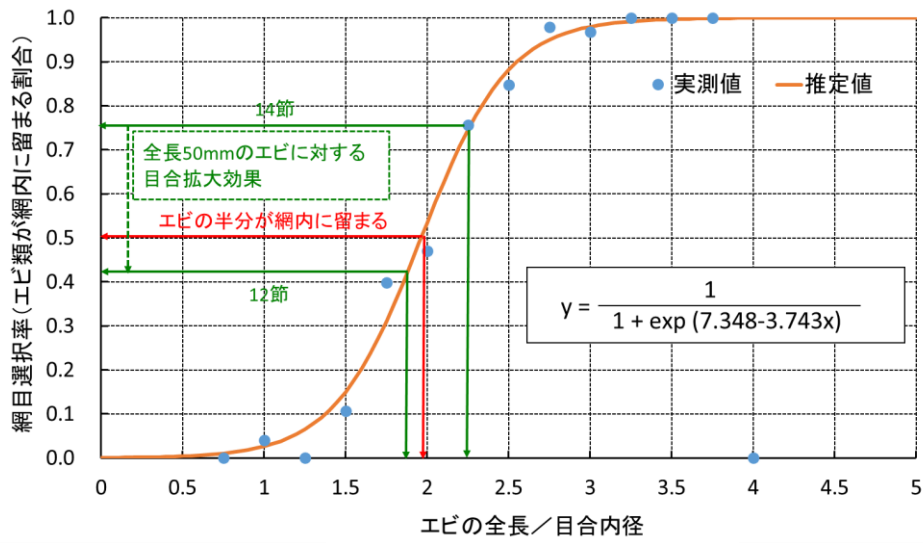


図3 エビ類の網目選択性

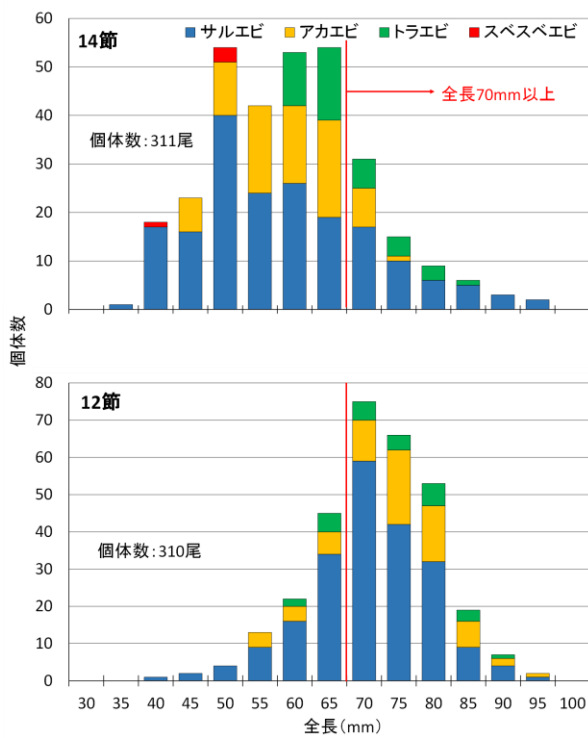


図4 エビ類の目合別全長組成

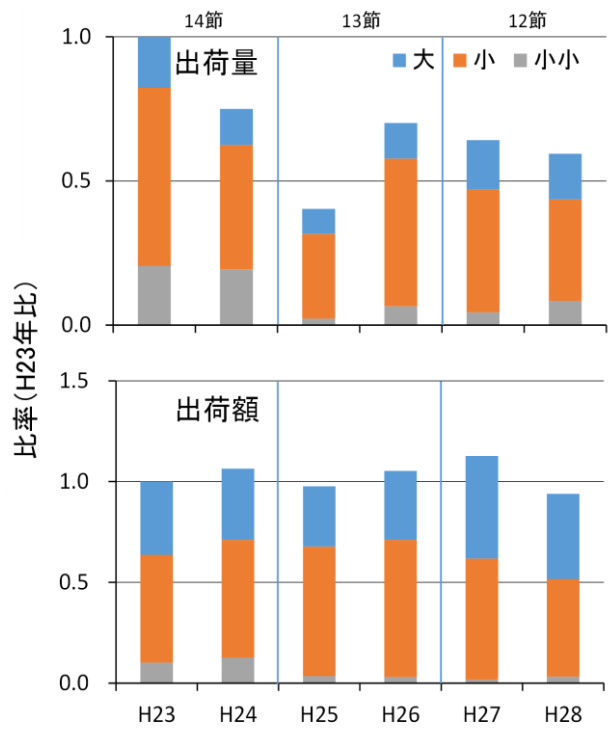


図5 エビ類の出荷量および出荷額の推移